

超高齢社会に求められる医療 「質の高い医療」を提供し続けるためには ～すべては患者さんの人生を実り多いものにすること～

国立循環器病研究センター 理事長

橋本 信夫 氏



ボストン・サイエンティフィック コーポレーション CEO

Mike Mahoney 氏
(マイク・マホーニー)



超高齢社会を迎えた我が国では、医療財源の不足、全身疾患を抱える高齢患者の激増、多死時代の到来など、医療を取り巻く環境は厳しさを増している。こうした中で、「質の高い医療」を提供し続けるためには何が必要なのか。脳血管と心臓血管の両部門を併設し、世界的にも稀有なナショナルセンターとして、最先端の研究と臨床を手がける国立循環器病研究センター。1979年の創業以来、低侵襲治療（インターベンション）に特化し、革新的な製品を送り出してきた医療機器メーカー、ボストン・サイエンティフィック。共に患者さんのQOLの向上、患者さんへの貢献を理念とする同センター理事長の橋本信夫氏と、同社CEOのマイク・マホーニー氏に対談していただいた。

「質の高い医療」提供のために 効率化と医療機関の再編を

橋本 日本は皆保険制度の下、フリーアクセス、ハイクオリティ、ローコストの医療体制を保持してきました。しかし、高齢化や医療技術の進歩が加速する中で、これらを同時に実現することは難しくなっています。この先も「質の高い医療」を提供するためには、各病院が効率化を図り、地域における医療機関の再編が必要です。そのポイントは3つあり、第1は地域におけるハブ&スポークの構築。これは基幹病院（ハブ）が連携する病院（スポーク）をオーガナイズすること。第2に、全国の病院でも同じクオリティを保つために、ITを駆使したテレメディスン（遠隔医療）を構築すること。そして、第3が医療情報のクラウド化です。

2013年6月、当センターは移転建替を決定しました。「メディカル・ベースト・タウン」というコンセプトの下、病院と研究所が一体化した新センターを核に市民病

院を隣接。スーパーマーケットや健康関連の商業複合施設のほか、住宅地や高



齢者のケア施設も設置。新センターを囲むように企業や研究所を誘致し、全体を1つのエリアとして構成します。さらに新センター内にはオープン・イノベーション・センターを創り、企業や他の研究機関との連携・促進を図ります。

マホーニー 橋本先生の構想とその推進力に感銘を受けました。脳神経外科手術や大動脈弁置換術などの治療は拠点病院に集約させ、他病院とはシステムで連携し、高度医療の重複を省くことで効率化さ

せるという考え方は素晴らしいと思います。この取り組みは世界の規範になると思いますし、とてもエキサイティングです。

橋本 問題は、新センターと市民病院、全く異なる2つの病院をどう連携させるのか。これは1つの実験ですが、実現すれば日本全体の医療機関再編のヒントになるのではないかと考えています。また、その思いから新センターの方向性を、Beyond the cutting edge（最先端のその先へ）と決めました。この言葉の中には、最先端に行けば解決すべき課題が見える、だからこそ我々は最先端に行かねばならないという決意を込めています。

すべては患者さんのQOL向上のために テクノロジーを活かす ソリューションを提供

マホーニー 弊社も医療機器メーカーとして、病院が直面する課題は理解しています。これまで循環器内科や脳神経外科をはじめとする様々な製品を開発する中で、特に低侵襲治療に専念してきました。

しかし、私たちが提供するの、臨床的価値だけでなく、入院期間の短縮などの経済的な価値、そして患者負担の軽減です。例えば、日本で提供している大動脈弁置換術のプログラムでは、通常2～3週間の入院期間が1～2泊に短縮できるケースが増えています。病院にとっては患者1人当たりのコストが下がり、患者さんは早期退院によって予後の向上が目指せます。

また、テクノロジーを最大限に活かすためのトータルソリューションも提供しています。それがEDUCAREとADVANTICS™という2つのプログラムです。1つ目のEDUCAREは医療者を対象とした患者ケアをサポートする教育とキャリア向上のためのトレーニング。医療者の技術的な知識やスキルのアップのみならず、さらにリーダシップを発揮するためのプログラムの提供なども通して、臨床的成果の最大化を促進します。

もう1つのADVANTICS™は、病院の生産性を高めるプログラムです。設備投資や融資の検討、患者数を増やすアドバイス、遠隔診断・モニタリングツールなど、弊社が持つベストプラクティスを提供しています。

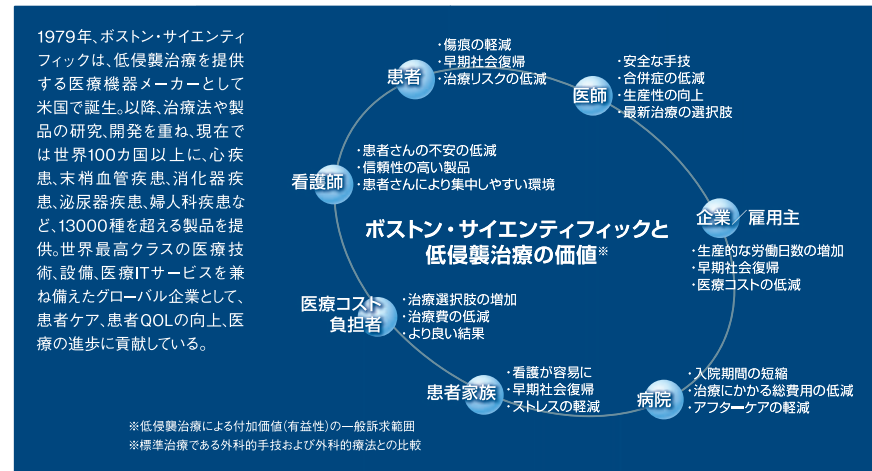
橋本 どちらも素晴らしいプログラムです。私たち医療者は病気になった人を治療してきましたが、それでは患者さんも医療費も減りません。これからいかに病気にならないようにするか、予防を含めた先制医療や、QOLを低下させるボトルネックを見つけ治療することが必要です。

マホーニー 予防や先制医療でQOLを改善する事例として、最近、FDAに認可された弊社の低侵襲デバイスをご紹介します。ご存じのように心房細動は心臓の左心耳に血流が滞り、脳梗塞のリスクが高まる疾患ですが、このデバイスは左心耳を閉塞して脳梗塞を防ぎ、抗凝固剤投与の必要性を減らします。デバイスを装着することでリスク低減とQOLの改善へと導きます。

テクニックから始まる医療 そこには新しい発見と進化がある

マホーニー 自ら健康を管理できるよう

ボストン・サイエンティフィックが考える低侵襲治療の概念



になれば、患者負担と医療費が減り、コスト削減につながります。弊社が開発した植込み型除細動器とペースメーカーは、予防と治療の両方の実現を目指しています。患者さんは診断機能付きペースメーカーによって、病院から離れた場所にいても携帯電話で血圧と体重を医師に報告することができ、病院にいる医師はデータから問題の兆しがあれば薬を減らす指示をしたり、食生活の改善を促すなどして来院を最小限に抑えます。

橋本 そうした取り組みは医療費がかか



るように思われがちですが、実はそうではありません。2002年にノーベル生理学・医学賞を受賞した英国の生物学者シドニー・ブレナー（Sydney Brenner）は、次のように述べています。

Progress in science depends on new techniques, new discoveries, and new ideas, probably in that order. (テクニックがなければ発見はない。発見しなければアイデアは生まれない)。

つまり、医療技術も医療機器もテク

ニックから始まり、そこに新しい発見があり、次にコンセプトやアイデアが生まれる。QOLを高める医療機器を発展させていくと、治療法の新しいコンセプトが生まれ、もっとシンプルで低コストなものが出てくるのではないかと考えています。

マホーニー 弊社のミッションとして掲げているのは、Advancing Science for Lifeです。この使命に対し、私たちはイノベーションで応えていきます。超高齢社会を迎えた日本は課題先進国であり、そこに直面する問題に、弊社は製品のみならず、医療の生産性を高めるソリューションを提供し貢献していきます。

新しいビジネスモデルに挑戦し、社会に尽くされている橋本先生の姿に大変感動致しました。本日はお会いできて光栄です。ありがとうございました。

橋本 貴社は、企業姿勢や将来の方向性が明確なので、大いに期待できと感じました。また、この対談で私たち医療者にとって非常に大切なことを知ることができました。



■ お問い合わせ

Boston Scientific
Advancing science for life™

ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社
本社 東京都中野区中野4-10-2中野セントラルパークサウス
www.bostonscientific.jp

超高齢社会に求められる医療 「質の高い医療」を提供し続けるためには ～すべては患者さんの人生を実り多いものにすること～

日経ビジネス2015年9月28日号抜刷



●この小冊子は日経BP社の許可により「日経ビジネス」2015年9月28日号から抜粋したものです。禁無断転載